

## 文献紹介

### 東京学芸大学地理学会シリーズ II 第1巻『日本をまなぶ 西日本編』 第2巻『日本をまなぶ 東日本編』

上野和彦・本木弘悌・立川和平 編 古今書院

阿部 和俊

本書は東京学芸大学地理学会シリーズ II の第1巻（2017年10月1日刊行）と第2巻（2017年10月17日刊行）である。因みに第3巻は『景観写真を読む』、第4巻は『東京を学ぶ』、第5巻は『地図を読む』が企画されている。

第1巻の章立ては、第1章 九州・沖縄地方 第2章 中国・四国地方 第3章 近畿地方 であり、第2巻の章立ては、第1章 中部地方 第2章 関東地方 第3章 東北地方 第4章 北海道地方 である。

この地域区分はもっとも一般的であるが、評者のような団塊の世代は大昔に学んだ中学校の地理の教科書を想起する。もっとも、当時の教科書は日本の後に世界の章が続いていた。つまり、地誌の考え方による構成であった。高校で学ぶ地理の当時の教科書はいわゆる系統地理の考え方で構成されていた。

この場合、多くは最初に図法を学習し（させられ）、自然地理（自然環境）の学習に移り、そして人文地理・産業地理が並ぶという構成だったと記憶している。ついでながら、最初に学ぶ図法が難しく（面白くなく）、多くの「地理嫌い」を生む理由だと言われていた。この話は地理学界に関わるようになってから教えてもらったことであるが、十分得心がいった。あちこちで目にするメルカトル図法はまだしも、サンソン・フロムスチード図法やモルワイデ図法などが多くの高校生にとって面白いわけがない。ボンヌ図法などにいたってはちんぷんかんぷんであろう。

つまり、地理学の世界に進んだ多くの人は、この難関をなんとか潜り抜けた（あるいは分からないまま）勇気を持って進んだ人と言うことになる。評者もそのひとりである。

なぜ、このような昔話を書いたかという、この2冊を読んで、大変面白く、地理の初心者入門書として最適だと思ったからである。飛躍しているかも知れ

ないが、こういう書こそ高校の地理学の教科書にすべきではないかと思ったからである。このことは著者たちの問題意識とは異なるかもしれないが、以下、この観点から書いてみたい。

全章の章立てを詳述する紙幅の余裕はないので、第1巻第1章の九州地方の目次を紹介すると、以下の通りである。

- 第1節 九州の自然環境と災害
- 第2節 沖縄のサンゴ礁と保全
- 第3節 沖縄の観光と世界遺産
- 第4章 八幡製鐵所と筑豊・三池炭鉱
- 第5節 九州工業地域の変化
- 第6節 南九州の畜産業
- 概説1 日本の地形
- 概説2 環境問題
- コラム1 日本の国土

コラム2 公害のまちから生まれ変わった水俣市

この内容で九州の大事なポイントはほぼ抑えられるし、発展的な展開も可能である。少し大袈裟に言えば、普遍的な課題と学習も可能である。自然地形・第1次産業・第2次産業・第3次産業を学ぶことができるし、産業の発展の負の遺産としての公害問題も取り上げられているからである。もちろん、他にも重要な問題、例えば、過疎問題や伝統産業・大都市問題などがあるが、それは他の章で取り上げられている。

第4節を例に少し詳しく紹介しよう。第4節は「八幡製鐵所と筑豊・三池炭鉱」である。1901年に操業を開始した「官営八幡製鐵所」は言うまでもなく近代日本の一大プロジェクトであり、日本史の教科書では必ず取り上げられている。

この八幡製鐵所の建設には背後の筑豊炭田の存在が不可欠なのだが、中学校や高校の日本史の教科書では、このことは意外にもあまり取り上げられていない。言

及されていても重要視はされていない。「石炭が鉄を呼ぶ」というのは経済学のイロハであるし、工業地理では資源立地の代表である。

この節では「石炭が鉄を呼ぶ」や「資源立地」という用語は取り上げられてはいないが、内容はまさにこのことである。これらの用語は教師が教えればよい。大製鉄所の建設により、一寒村が都市へと発展し、そして社会の変化によって衰退していくことが簡潔に述べられている。地域の変化の学習である。

炭鉱地帯も当初は破竹の勢いで発展するが、エネルギー革命や工業立地の変化（製鉄所がこの地から移転する）という社会の変化によって衰退する。紙幅の関係もあって、このことは詳細には語られていないが、それは致し方ない。繰り返すが教師が補えばよい。衰退した地域をどうするか。製鉄所の跡地に誘致されたテーマパークが紹介されている。溶鉱炉は文化遺産・近代化遺産との関係で言及されている。ここから、いわゆる「まちおこし・活性化政策」に話を広げていくことも可能であろう。過疎問題や村おこしについては、第2巻の第4節「青森農村女性の村おこし」で言及されている。

評者は長らく愛知教育大学に勤めていたが、学生からしばしば「三重県は近畿地方なのに、なぜ東海地方と言う時には含まれるのですか？」と問われた。よく出る質問ではある。近畿地方に対応するのは、東海地方ではなく、中部地方であり、東海地方に対応するのは北陸地方である。ちょっと考えれば分かることではあるが、基礎的な知識がないと混乱する。

現在使用されている、北海道・東北・関東・中部・近畿・中国・四国・九州という地域区分は20世紀初頭に文部省によって採用されたものであるが、混乱はこれに起因している。中部地方というのは、東海道・東山道・北陸道という性格の異なる3つの地域を合体させたものであるが、関東と近畿を囲った残りの中央部分を便宜的にまとめたものと言われても仕方がない。

現在、頻繁に使用される東海地方というのは、名古屋の影響力が大きくなったからである。では、そこに静岡県を含むのか？東海地方に岐阜県を含むことは名古屋都市圏に居住している者にとっては常識であるが、岐阜は海に囲まれていないから「東海」という用語になじむのか？という疑問が出てくる。ここで重要なのは、現在ほとんど顧みられることのない「東山道」という概念である。多くの人はもう知らないであろうが、実は重要な知識なのだ。このことについて、第1

巻第3章の概説4「地域の変遷」で言及されている。評者が本書を高く評価するのも、若い人にも是非知っておいてもらいたい、このような事項にも言及しているからである。

評者は冒頭において「このような本こそ高校の教科書にふさわしい」と書いた。教科書にするには常識的には「同じような2冊の世界編」が必要となる。多くの読者は「異常な分量となり、(高校の)教科書としては不適切」だと反論するであろう。

しかし、たとえばフランスのリセ用の地理の教科書を見てみるがいい。NATAN社のリセ用の地理の教科書は圧倒的な質量である。日本の大学の教養の授業で使用すれば、学生がついて来ることができるかどうかというレベルである。もちろん、日本とフランスでは国の歴史や社会構造、高校進学率も大学進学率も大いに異なるので、一概には比較できないことは承知している。それでもなお、本書を一読して「高校生から読ませたい」と強く思わずにはいられなかった。このような本こそが「地理好き」を育てるものだからである。